

市長記者会見記録

日時：2019年7月5日（金）14時00分～14時48分

場所：第3庁舎18階 講堂

議題：子ども・若者応援基金を活用したグローバル人財育成事業について（こども未来局）

【話題提供】岡本太郎美術館開館20周年記念展の開催について（市民文化局）

【話題提供】川崎港の利用促進等のためのタイ、ベトナム訪問について（港湾局、経済労働局）

<内容>

<子ども・若者応援基金を活用したグローバル人財育成事業について>

【司会】 お待たせしました。ただいまより、市長記者会見を始めます。

本日の議題は、子ども・若者応援基金を活用したグローバル人財育成事業についてとなっております。また、話題提供といたしまして、岡本太郎美術館開館20周年記念展の開催についてと、川崎港の利用促進等のためのタイ、ベトナム訪問についてでございますが、その2件につきましては、議題の質疑終了後、改めてご説明いたします。

それでは、初めに、子ども・若者応援基金を活用したグローバル人財育成事業について、福田市長から、ご説明いたします。それでは、市長、よろしく願いいたします。

【市長】 よろしく願いいたします。

それでは、子ども・若者応援基金を活用したグローバル人財育成事業について、このたび、今年度の取組や今後の方向性が固まりましたので、ご説明いたします。

お手元資料の2枚目をご覧ください。

1は、子ども・若者を取り巻く現状でございます。近年、あらゆる場所でグローバル化が進む中、さまざまな分野でグローバルに活躍できる人材が求められており、国においても、アントレプレナーシップ教育を推進しているところです。

こうした中、本市においてもこれまで、子どもの育ちの基盤となる、将来の社会的自立に必要な能力や態度を持ち、多様性を尊重しながらともに支え、互いに高め合える人材の育成を目指し、共生・協働の精神を育む取組を進めてきたところでございます。

2にまいりまして、グローバル人財育成事業については、事業全体の基本的な考え方や枠組みをお示ししております。中央圏みのグローバル人財育成事業の主たる目的といたしましては、本市の子ども・若者がさまざまな分野において、みずからの将来像や、それに向けたキャリアプランをさらに具体化し、国際的な幅広い視野を持って活躍する人材を目指して挑戦する新たな一歩を後押しすることでございます。

本市内や近郊には、さまざまな大学や企業の研究機関などが立地しています。こうした本市の強みを最大限に生かし、産学官連携のもとでグローバル人財育成事業を展開していくことで、将来に向けて、社会に求められるグローバル人財の育成をより効果的に進めることができると考えております。また、こうした取組に対しまして、市民の皆様には、子ども・若者応援基金への寄附という形で応援していただければと考えております。

資料右でございますが、3に、子ども・若者応援基金について触れております。平成30年度に創設したこの基金では、これまで機会格差をなくす取組として、社会的養護奨学給付金、そして、学習支援費の2つの事業を実施してまいりました。この機会格差をなくす取組に引き続き取り組むことに加え、新たに、子ども・若者の挑戦の後押しといたしまして、グローバル人財育成事業を実施することとしたものでございます。今後は、大学や企業、関係団体などから広く提案募集をしてまいりますが、より具体的なイメージを持って提案していただけるよう、モデル的に2つの先行事業を実施してまいります。

それでは、先行事業の実施についてご説明いたしますので、資料3枚目をご覧ください。

初めに、資料左側でございますが、Stanford e-Kawasakiでございます。このプログラムは、スタンフォード大学の国際異文化教育プログラム(S P I C E)が提供しているインターネットを利用した遠隔講座、Stanford e-Japanを本市向けにカスタマイズしたものでございます。米国カリフォルニア州に立地するスタンフォード大学は、シリコンバレーの形成に大きな役割を果たしてきました。そうした立地や歴史的な背景から、本市の子ども・若者がスタンフォード大学とシリコンバレーの形成過程や、起業を支える多様なサービス資源が集積したコミュニティーの状況、幅広い人種や民族的な文化の多様性などを教材として、遠隔講座の受講や他の参加者との交流などのプログラムを経験することを通じて、国際的に幅広い視野を持って積極的に挑戦し続けるグローバル人財を育成するものでございます。

今年度の対象といたしましては、市立川崎高校及び橘高校の生徒各10人程度を想

定しております、7月から募集を行い、9月中に受講者を決定の上、10月から3月までの間、当該カリキュラムを受講します。

次に、資料右側でございますけれども、「ハイパーloop・コンペに挑戦！」でございます。このプログラムは、慶應義塾大学新川崎タウンキャンパス内での活動の1つでありますハイパーloop・コンペに参加する浮上ポッドの製作活動に本市の高校生が参加するものです。慶應義塾大学大学院のシステムデザイン・マネジメント研究科（SDM）は、マクロな視点から問題を俯瞰するとともに、解決策はミクロに精緻化することで全体統合型の課題解決を提案することを理念に掲げています。

この研究科の活動の1つとして、平成28年度から開催されているハイパーloop・コンペに参加しております。このコンペでは、資料右下の写真のように、チューブ内にポッドを浮上させ、移動させる技術として速さを競うものとなっております、SDMでは、このコンペに向けまして、新卒者から多彩な分野の社会人、ヨーロッパやアジアなどからの留学生などが集まり、日々、研鑽を積み重ねながら研究を行っているところであります。

なお、このコンペは、第3回となった平成30年度は7月に米国で開催され、全米各地の大学とドイツ、オランダ、オーストラリア、日本から合わせて30チーム、学生800人が参加しているとのことでございます。本市の子ども・若者がこうした学術研究機関でのプログラムに体験・参加することを通じ、グローバル化が進む社会で活躍するための夢や資質を育み、国際的な幅広い視野を持って積極的に挑戦し続けるグローバル人財を育成するものでございます。

今年度の対象者といたしましては、市立総合科学高校で電子機械科に在籍する生徒を中心に、5人から10人程度を想定しております、7月から8月にかけて校内で参加者を決定し、9月から3月までの間、製作活動に参加します。

先行事業は以上の2つの事業でございますけれども、今後は、この先行事業をモデルとしながら、グローバル人財育成事業への提案を広く募る予定として、現在、準備を進めております。

地域にさまざまな大学や企業の研究機関などが立地し、海外からの研究者等も数多く活動しているという本市の持つ強みを最大限に生かして、産官学連携のもとでグローバル人財の育成に取り組んでいくため、大学や企業、関係者の皆様にぜひ企画をご検討いただき、多くの提案がいただけるものとしてまいりたいと考えております。

募集時期や要件、提出書類等の詳細につきましては、決まり次第、情報提供させていただきますと存じます。以上でございます。

【司会】 それでは、ただいまご説明いたしました議題に関することについて、質疑に移らせていただきます。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【幹事社】 よろしくお願ひします。

【市長】 お願ひします。

【幹事社】 2つのプログラムがあると思うんですけども、各プログラム、若者がどんなことを学んで、まちにどんなことを還元するのかと、若者に期待することというのを教えてください。

【市長】 それぞれの対象になる高校に通っている生徒さん、非常に優秀な子どもたちだと思いますが、やはりグローバルで活躍する人材になっていくためには、そういった場に出ていくというか、しっかり自分の考え方を発言していく、あるいはいろんな意見や多様性のある意見を受けとめていくというような、そういった幅広い資質を磨いていくための今回のプログラムだと思います。やや何と申しますか、スタンフォードの遠隔授業ですとか、あるいは慶應義塾大学の研究者たちに高校生たちが交じってということですから、そういう意味ではかなり、ちょっと一歩背伸びしていくような感覚はあると思うんですが、そういったチャレンジする気持ちというか、そういうものをぜひ育んでもらいたいなと思っています。

【幹事社】 ありがとうございます。

【幹事社】 一応この2つとも、スタンフォードも慶應も、公募という形は形なんですか。

【市長】 公募、生徒さんのですね。

【幹事社】 はい。

【市長】 はい、そうです。

【幹事社】 ただ、一応この例えば慶應のほうを見たりすると、市立総合科学高校に在籍する生徒、それを対象としてこれから募集して、一杯になったときはどうするんですか。

【市長】 いわゆる選考の過程で、それこそ多数になってしまえば、選考を少し厳しくしていくということは必要になってくると思います。

【幹事社】 じゃ、やっぱりこの程度の人数に絞って選考するということになるんですね。

【市長】 そうですね。

【幹事社】 左側のほうを見ると、推薦を受けた生徒となっているんですけど、これ

はもうあらかじめ、ちょっと言葉は悪いですけど、あたりをつけた生徒が参加すると、学校側でという感じになるんですか。

【市長】 あたりをつけるというか、学校の中で呼びかけていくということでしょうから、そこに手を挙げてくれるかどうかというのは、まさに自立的な判断だと思いますが、当然、学校のほうからもやってみたらどう？というふうなお声掛けはさせていただくことというのはあると思います。

【幹事社】 この推薦というのと、この公募、募集というのとちょっと何か。ちょっと理解がほしい。

【市長】 ごめんなさい。どこをご覧になっておられますか。

【幹事社】 このスタンフォード大学の対象者、当該校からの推薦を受けた生徒となっていますね。

【市長】 はい。

【幹事社】 それ、全体スケジュールを見ると、7月から募集を行い、選考して決定になっているんですけど、この推薦と募集というのがちょっと何か。

【市長】 いわゆる公募というか、募集ですね。

【幹事社】 ええ。

【市長】 はい。ですから、広く川崎市内の高校生全部どうぞという形ではなく、今回はこの2つの高校に在学している高校生という形になります。

【幹事社】 ある程度学校からの推薦を受けた人が対象になって、その中から選ぶという意味ですか。

【市長】 いや、詳しく説明してもらっていいですか。

【こども未来局総務部企画課長】 はい。それぞれの学校のほうで生徒さんの募集をして選考をしていただいて、選考の結果として各校10名程度推薦をいただいて、その推薦をいただいた方がこのプログラムに参加するというイメージでございます。ちょっと表現としてわかりにくかったかもしれませんが、そういう趣旨でございます。

【幹事社】 じゃ、この対象者の人数というところを読めばいいということですね。7月から、一応そういう選考を行って、だけど、選考というか、するんだと。いずれにしても、学校の推薦を受けた人が対象になるという意味ですね。

【こども未来局総務部企画課長】 はい。

【幹事社】 わかりました。

【幹事社】 各社さん、お願いします。すいません。

【幹事社】 申し訳ない。すいません。同じく幹事社です。

Stanford e-Kawasakiのほうは、これ、Stanford e-Japanという既にあるプログラムを、川崎市が高校生向けにカスタマイズしたということかと思うんですが、そのカスタマイズというのは、具体的にはどういったことをされているんでしょうか。

【市長】 まず、これまでスタンフォード側と、いろんなどという人材を川崎は目指して育てたいんですかというところから、議論は始まっています。ですから、こういった例えばテーマにしても、多様性だとかアイデンティティーとか、起業・創業についてだとかは、まさに川崎オリジナルのメニューをつかって、それに見合う講師陣をスタンフォード側でそろえていくと、そういうふうな形になっています。ですから、今回も、10月から3月まで4回ということですね。これはStanford e-Japanのものとは回数だとか、期間だとか、対象人数だとかというのも、それぞれ異なっていて、川崎市用にやっているということでございます。

【幹事社】 そうしますと、基本的には、この設定されているテーマとか、回数とか、基本的には川崎市オリジナルのプログラムであるという理解でよろしいでしょうか。

【市長】 はい、その通りです。

【幹事社】 わかりました。それと、あと、このStanford e-Kawasakiと、あと慶應との「ハイパーloop・コンペに挑戦！」のほう、それぞれ今回は対象者が川崎市立の高校の高校生ということで限定されているわけですがけれども、今後、対象者を拡大するとかというお考えはございますでしょうか。

【市長】 この両プログラムについてですか。

【幹事社】 はい。

【市長】 そうですね。あらゆる面で、今回やってみてどうだったのかというような検証をしていかなくちゃいけないと思いますが、何分初めての試みですので、今回やってみて、もし改善点があればまた変更を加えていくということは可能性あると思います。

【幹事社】 はい、わかりました。幹事社からは、以上です。各社、質問お願いします。

【記者】 すいません。よろしくお願いします。

【市長】 お願いします。

【記者】 今回、スタンフォードの件で、3月には、受講者らに対する賞を授与するというスケジュールを頂戴しておりますけれども、これ、賞を受賞すると何かいいことがあるのか。要は、進学する方が多いかと思うんですが、何らかの形で推薦枠に入って進学がかないやすくなるか、そういうアドバンテージがあるような賞になるん

でしょうか。

【市長】 いいえ、それは想定しておりません。

【記者】 誉れだけなんですか。

【市長】 はい。

【記者】 わかりました。毎度ですいません。これはそれぞれ予算額はどんな、どのボリューム額の予算額なのか。その予算の場合に、主にどういうものに充てられるものなのか。人件費なのかなと思って、今お伺いしていますが、いかがでしょうか。

【市長】 まず、スタンフォードのほうは8万ドルというものになっています。約800万円ぐらいですか。1ドル100円換算でいくと800万円ぐらいということで、慶應義塾大学のところはおよそ100万円というふうに想定しております。スタンフォードのところは、当然、講師陣にかかる費用ですとか、若干の設備というか、通信環境を整えたりという費用としてかかってくると思いますが。

【記者】 こういう案をつくるのは、事務方が一生懸命探してきているかと思いますが、何か市長としてリクエストしたような部分というのがこのプログラムに落とし込まれている部分がございますでしょうか。

【市長】 ちょっと先ほどもご説明したように、これから市内にある企業だとか大学だとかという、そういう人たちといろいろなこの連携ができるのではないかと。その中で、とはいっても、漠然と言っても企業や大学の皆さんもイメージつかないだろうから、そういった意味では、こういったプログラムが人材を育成していくというふうなのでは、こういうのができますよというふうな見本になるような、そういったものをつくっていかうということで関係局と議論してきたということです。

【記者】 わかりました。ありがとうございます。

【記者】 今の予算、伺いましたが、それを賄うのは、この基金、応援基金で全て賄うということなんでしょうか。

【市長】 はい。

【記者】 今、これまでに寄附等でどれぐらい集まっているか教えてください。

【市長】 残額について、はい。

【こども未来局総務部企画課長】 現在の積み立ての残額は約1億5,000万円ございます。

【記者】 じゃ、その中から、この。これ、1年間にでしょうか、8万ドルと100万円というのは。

【市長】 はい、そうですね。

【記者】 大まかなところで。

【市長】 1年間で、今回のプログラムに関してということですね。

【記者】 その1億5,000万円は全て寄附ですか。それとも市からも出ている。

【市長】 市からは、出てない？

【こども未来局総務部企画課長】 全て寄附。

(注:「競馬競輪事業益金」が一部含まれています。)

【記者】 全て寄附。

【記者】 すいません。スタンフォード大学のほうのプログラムなんですけれども、こういった国際異文化教育プログラムって、私も詳しくはないんですけれども、他大学でもやっているのかなと思うんですが、スタンフォード大学のこのプログラムを選ばれた理由というのは、何なんでしょうか。

【市長】 シリコンバレーの、先ほども申し上げましたけど、形成にこのスタンフォードが圧倒的な力を持っているというのは、本当に人材の多様性というものをとにかく大事にして、アントレプレナー教育をしっかりと行ってというのは、まさに私たち川崎市の子どもたちに身につけてもらいたい要素が非常に色濃く入っているというところで、そういったプログラムの中でStanford e-Japanが先行事例としてあって、そういったものからこういう議論が始まったというのがございます。

【記者】 ありがとうございます。

【記者】 すいません。これまでの社会的養護奨学給付金などに引き続き取り組んでいくということなんですけど、これ、今年度はどれぐらい使うんですって。

【市長】 予算額ですか。

【記者】 ええ、そうです。

【こども未来局総務部企画課長】 予算的には、それぞれの事業に、奨学金のほうが約1,600万円、学習支援のほうは約1,300万円の予算になっております。

【記者】 それは今年度？

【こども未来局総務部企画課長】 今年度です。

【記者】 とりあえず今年度については、トータルで言うと、使うお金のバランスが2,900万と大体1,000万ぐらいということなんですけれども、これもとんとんでやっていく、両方、要するに今回、新しく発表されるグローバル人財育成というもののほうも、今後どんどん増やしていくというイメージなのか、それとも大体これぐらいの規模で基金を使っていくというイメージなのか。

【市長】 これも、今後どのぐらい提案が出てくるのか、それに対する費用的なもの

はどのぐらいなのかというのがまだ全く見えてない状況ですので、どういうバランスになっていくのかと。ただ、どちらをというより、金額的なバランスということではなくて、その事業の意義だとかをしっかりと検討した上で基金を使っていくということが大事だと思っています。まだ詳細は決まっていますが、今回、モデル的な選考プログラムをやりますけれども、今後いろいろなところからご提案いただいた場合には、私たちでの恣意的な判断にならないように、一部外部の有識者などの選考という形、そういったものの仕組みづくりは大事かなと思っています。

【記者】 今回、このスタンフォードさんと慶應さんというのは、市のほうからアプローチしているのか、それとも先方から、こういうものがあるよという何かあれがあったんですか。

【市長】 いや、両方、市からですね。

【記者】 それは特に第三者機関とかに諮るわけではなく、庁内での検討でということですね。

【市長】 ええ、そうです。

【記者】 はい、わかりました。ありがとうございます。

【記者】 今回はどんなビジョンを持った子どもたちに参加してほしいとお考えかというのを1点伺いたいのと、もう1点は、今回、高校生が対象になっていると思うんですが、高校生という時期を対象にされたというところの目的をお伺いできればと思います。

【市長】 ちょっと先ほどの説明で後押しをするという表現をしましたけれども、子どもたちがこれから世界に飛び出していく、いろいろなものに挑戦していく時の少しその後押しをしてあげようということですから、先ほど申し上げたように、少し背伸びしたようなところに行きますから、そういった意味での勇気を持ってこれからいろんなものに挑戦していくとか、世界は広いぞという、そういったものを知ってもらいきっかけになってくれればいいなと思います。将来的には、そういったことが川崎だとか、世界のためにつながる人材を川崎から育てていければなというふうには思っています。

【記者】 ありがとうございます。

【司会】 ほか、いかがでございますか。よろしいでしょうか。それでは、本議題につきましては、これで終了といたします。関係職員の方は交代をお願いいたします。

《岡本太郎美術館開館20周年記念展の開催について》

《川崎港の利用促進等のためのタイ、ベトナム訪問について》

【司会】 それでは、次に、話題提供といたしまして、岡本太郎美術館開館20周年記念展の開催についてと、川崎港の利用促進等のためのタイ、ベトナム訪問について、市長からご説明いたします。それでは、市長、よろしくお願いたします。

【市長】 初めに、岡本太郎美術館の開館20周年記念事業についてご説明させていただきます。

岡本太郎美術館は、川崎市ゆかりの芸術家、岡本太郎氏から寄贈された貴重な作品や資料を収蔵し、その芸術性を顕彰する美術館として、平成11年10月に開館いたしました。開館20年の節目の年に当たり、これまでのご支援に対する心からの感謝と岡本太郎美術館の魅力をより多くの方々にお伝えできればと考えております。

まず、「岡本太郎美術館20周年記念展」でございます。「これまでの企画展みんな見せます！」と題し、この20年間に開催した、およそ60回の企画展の中から、各展覧会の象徴的な作品を集め、前期と後期の2回に分け、半年にわたって展覧会を開催いたします。

前期展「岡本太郎・縄文から現代へ」は、7月13日土曜日から、後期展「芸術と社会・現代の作家たち」は10月26日からの開催となります。また、この間、10月25日金曜日には、開館20周年記念式典を予定しております。

次に、記念展の関連イベントといたしまして、7月20日土曜日、ともに本市出身である坂本九と岡本太郎をテーマとしたコンサートを皮切りに、これまでに開催したイベントの中から特に好評だった企画など、記念展の開催にあわせて、幅広い世代で楽しんでいただけるさまざまなイベントを実施いたします。

次に、市民サービス充実事業といたしまして、前期展にご来場の方、毎日先着200名に、開館20周年記念シールを贈呈いたします。また、今回、リニューアルをする美術館、リーフレットと展示作品の音声ガイドにつきまして、それぞれ多言語化を図り、いずれも英語、中国語、韓国語バージョンをご用意いたします。

なお、音声ガイドは有料、300円のサービスで、現在、改修工事のため休止しております常設展の10月19日の再開に合わせ導入いたします。また、登戸、向ヶ丘遊園駅等の駅構内や、商店街での記念フラッグやポスターの掲示をはじめ多くの関係団体のご協力により、地域一体となった広報活動を展開しております。

今回の20周年記念事業を通して、さらに多くの市民に岡本太郎美術館をより深く知っていただくとともに、皆様の声をこれからの活動に生かし、より一層、親しまれ

る美術館を目指してまいります。

次に、海外訪問について、ご説明をさせていただきます。

川崎港の利用促進、日本での就労・留学を目指す外国人材の現在把握のため、タイ王国のバンコク、ベトナム社会主義共和国のダナン及びホーチミンを7月11日から18日の予定で訪問します。

タイ・バンコクへの訪問についてでございますが、昨年4月に川崎港とタイのレムチャバン港を結ぶコンテナ定期航路が初めて開設いたしました。荷主様の関係者に対して川崎港の利便性を理解していただくために、航路開設後約1年を経たこの時期に、川崎港のポートセールスを行い、タイ航路のさらなる利用促進をするためにバンコクを訪問します。

次に、ベトナム・ダナンへの訪問についてでございますが、ダナン港とは平成6年から友好港として交流を続けておりまして、今年3月には、初めてダナン港と川崎港とを結ぶコンテナ定期航路が就航いたしました。このダナン港では今年、新たな港長が就任され、友好港としてさらなる関係構築や直行航路の就航による新規顧客の開拓を目的として訪問するものでございます。また、ダナン市人民委員会の幹部とも面会し、今後の両市の発展に関して意見交換を行う予定です。

最後に、ベトナム・ホーチミンへの訪問についてでございますが、出入国管理法等の改正により、今後、我が国に在留する外国人の増加が見込まれております。本市といたしましても、国の総合的対応策を踏まえ、新たな外国人材の受入れに向けた環境整備を進めておりますが、ベトナムにおける人材育成等の市場を把握するために、ホーチミンの関係機関の視察を行うものです。

なお、各訪問先の概要につきましては、参考資料をお配りしておりますので、そちらをご覧くださいければと思います。私からは、以上です。

【司会】 それでは、ただいまご説明いたしました2件と、市政一般もあわせてお受けいたします。進行につきましては、幹事社様、よろしくお願いいたします。

【幹事社】 よろしく申し上げます。

【市長】 お願いします。

【幹事社】 タイ、ベトナム訪問に関してなんですけれども、この訪問の様子というか、得たものみたいなのは、市民にどういった形で発表されるとかありますか。

【市長】 特にはあれ（発表）はしてないと思いますが、成果は政策を通じてしっかりと反映させていくということにしております。

【幹事社】 わかりました。あと、もう1点なんですけれども、今日の報道紙発表、

プレスリリースで、川崎市差別のない人権尊重のまちづくり条例に関するパブリックコメント手続を実施するというものが出たと思うんですけども、市長として、パブリックコメントを市民に、どういったものが欲しいかというか、呼びかけというかありますか。

【市長】 いえ。

【幹事社】 コメントを踏まえて。

【市長】 8日からパブリックコメントが始まるということで。

【幹事社】 来週からです。

【市長】 非常に関心の高いテーマだと思いますので、当然多くのご意見をいただくのだろうなというふうに予測しておりますけども、私どもから何か、こういった意見が望ましいということは一切ございません。

【幹事社】 わかりました。ありがとうございます。

【市長】 はい。

【幹事社】 すいません。タイ・ベトナムなんですけど、定期航路ができて、今度行かれると。この何というか、もう来てくれるという感触というか、前提があって行かれるのか、それとも新たにセールスだけのために行くのか、どういう経緯なんだろう。

【市長】 タイ航路というのは、昨年、就航しましたので。

【幹事社】 それで、できて、また今度、行かれるということで、また新たに参加してくれるところが既に何ら感触としてあるのか、あるいはそういうのはなくて、行ってセールスするのか。

【市長】 それぞれの訪問するところというのは、一部お取引があるところとかいうのもありますけども、その拡大だとか、あるいはさらにダナンのほうについても、川崎港を使ってほしいというふうな、そういった働きかけを行っていきたいと思います。私だけではなく、これまでもいろんな形で、港湾局の職員がアプローチも継続的にやらせていただいておりますので、この機会にぜひ成果を得られるように頑張っていきたいなと思っております。

【幹事社】 それで、訪問されるのは市長ほか職員3人というのは、これは港湾局の職員ですか。

【市長】 いえ、港湾局と経済労働局の職員が入っております。

【幹事社】 どのくらいの、何というか、局長とかじゃなくて。

【市長】 担当、港湾局は課長、それから、まさにポートセールスやっている責任の

ところと、それから、経済労働局は国際経済推進室の室長、部長級が参ります。それから、(総務企画局) 政策担当の課長が1名ということで、計、私を含めて4名という形での訪問になります。途中合流するという形でバンコクで、結構、人の出入りがございまして、途中で離脱するとか、途中で合流するとか、あるいは私が帰った後もさらにポートセールスをするというふうな形での出入りはございますけども、トータルとしては、私を含めて4名ということになります。

《第25回参议院議員通常選挙について》

【幹事社】 それと市政一般もということで、昨日、参院選が選挙戦スタートして、これは念のために聞くような話だと思うんですけど、市長に少なからぬ縁のある候補がいたりだとかして、今度の選挙戦に何か応援演説するとかいうような予定は今のところない？

【市長】 ございません。

【幹事社】 ないのね。

【市長】 はい。

【幹事社】 立場的にもちょっと、誰をこうするとかという、そういうのは一切。

【市長】 ないです。

【幹事社】 ないですよ。

【市長】 はい。

【幹事社】 わかりました。

【幹事社】 幹事社からは、以上です。各社、質問どうぞ。

《川崎港の利用促進等のためのタイ、ベトナム訪問について》

【記者】 すいません。

訪問の件でお伺いします。それぞれの国、それぞれ長いつき合いがあるかと思うんですが、なぜ今の時期に行く、今回、この時期なのか。市長の結構大事な時期にぶつかっているなんて勝手に思いますけれども、なぜ今なのかというのと、地方政府の長たる市長が表敬というか、訪問することの意味合いを教えてください。というのは、私の感覚的なイメージですけど、アジアの国とか、ロシアとかというのは地方政府の長が出向いていかないと、相手にしてくれないようなことがあるような話を聞いたことがあります。市長がわざわざ出向かれる意味合いというのが何かあれば、教えていただけますでしょうか。

【市長】 それぞれに意味があると思っで行っているわけでありませけれども、その成果というのはポートセールスの結果だとか、あるいは、これまでダナンというのは、覚書は結んでおります。経済交流に関する覚書などを結んでおりますけれども、実質的には港のつながりというのが強かった。プラスアルファ、ここから何か見つけ出せるものというのではないかというのをこれから検討していきたいなと思っますし、そういった実りのある意見交換ができればなというふうに期待をしております。

【記者】 わかりました。ありがとうございます。

【市長】 はい。

【記者】 じゃ、すいません。まず、この海外の訪問なんですけれど、例えばニチレイさんなんかは多分もう既にいっぱい航路を使っっており、この中にもありますけど、主な、主要荷主さんである。

【市長】 そうですね。

【記者】 ただ、その中でさらにポートセールスをかけるのは、まだほかでも運んでるものがあるから、それをもっと川崎に持ってきてくれと、そういうこと。

【市長】 そうですね。もっと川崎港を、ほかの港からというか、こっちに集めてくるというふうな、そういったこともやっていきたいと思っています。

【記者】 ちなみに、川崎港の強みというのは、端的に言うところなんでしょう。ここには、東京2020オリンピック・パラリンピックを控えて首都圏の物流が混乱することが懸念される。その中で、まだ川崎港はスムーズだよということは、それだけまだがらに空いているということなのか。

【市長】 いや、がらに空いているということではなくて、やっぱり川崎の強みというのは、冷蔵・冷房倉庫のバックヤードが強いというところからすると、これまで食品関係の皆さんからすると、タイのバンコクからの直接の航路というのは悲願だったわけでありませけれども、そこが昨年、初めて就航したと。そこに荷をもっともっ寄せてこなくちゃいけないというふうなのを、川崎の強みを生かして。そういった面に荷主様へのアピールというふうなのが必要かなと思っています。

【記者】 すいません。タイの航路って今年でしたっけ、昨年……。

【市長】 今年でしたっけ。今年ですよ。3月でしたっけ。

【港湾局港湾振興部誘致振興課長】 昨年の4月。

【記者】 昨年ですね。

【市長】 昨年の4月ですか。

【記者】 ベトナムのほうは今年3月。

【港湾局港湾振興部誘致振興課長】　そうです。

【記者】　そうですね。この人材育成状況等の状況というのは、これは、すいません。人材育成の状況を把握するのは、何のために把握されに行くわけでしょうか。

【市長】　これは私の個人的な興味の大変深いところなんですけれども、特に川崎のベトナム人材というのは非常に急速に伸びているところがあります。市内の企業とかも、今月ですか、商工会議所なども視察団を組んでベトナムに行くだとかということで、急速に人材の交流というか、交流というんじゃないですかね、受入れが進んでいます。その状況を、どういう教育をしているのか、あるいはこちらの受入れ環境としてどういうものが必要なのかということ、私自身も現地で理解を深めてきたいという思いもございます。

【記者】　これは逆に言うと、ポートセールスとかいうものというか、もっと川崎に、働くなれば川崎だよということをや何か売り込みに行くとか、そういうことではなくて。

【市長】　実際に今回、視察させていただくところの一部は、川崎の企業とも交流があるところもございます。ですから、そこを川崎に来ていただいても安心な状況をつくり出しますよということを書いておかないといけないなと思いますし、そのためにも、こちら側で整備しなくちゃいけないものというのは、多々これからあるのかなと思います。

【記者】　例えばそういう場では、川崎ではこういう多文化共生のまちづくりを進めてみたいということもアピールしてくるということになるのでしょうか。

【市長】　そうですね。実際に川崎で、ベトナム人材を受け入れて手厚くやっているところというのでも幾つも私も知っていて、そういう人たちとの話というものをしっかりと相手方にも伝えていかなければいけないかなと思っています。

《（仮称）差別のない人権尊重のまちづくり条例関連について》

【記者】　わかりました。すいません。また、ちょっと条例の話なんですけど、今回、素案が出てから初の会見なので、一応、市長のご認識も伺っておきたいなと思っています。

【市長】　はい。

【記者】　素案の発表の当日の担当課のレクで、なぜ条例をつくるのかということに関して、要するにヘイトスピーチが行われる蓋然性が高い状況が続いていると、いまだにというような説明がありました。実際には、ヘイトスピーチ解消法が3年前に施行されてから、川崎市の当局が市内でのヘイトスピーチというのを確認した事実が確

かなかったと思います。その状況で、今回、罰金刑付きの条例を定めるということに対する、その必要性というのがどういうふうなところにあるのかという辺りをちょっとお話を伺いたいです。

【市長】 ちょっと改めてになると思いますけれども、これまでも要は会館の使用などに対しても、警告を発しているというその意味というのは、ないとは思いますが、その蓋然性があると、高いという意味での警告をやっているということでもありますから、そういった意味では、実際にヘイトスピーチという形では認定しているという形ではありませんけれども、そういったことが行われる蓋然性は高いというふうな状況の中で、こういったものをつくっているということでございます。

【記者】 なるほど。じゃ、やっぱり警告が出されるような状況であるから、ヘイトスピーチが起きる蓋然性が高いという理解でいいのでしょうか。

【市長】 ごめんなさい。もう1回、よろしいでしょうか。

【記者】 警告書が出されたような事態が起きている。警告を出さざるを得ないような事態があったから、それは、すなわち蓋然性が高いので、そういう捉え方でよいのでしょうか。

【市長】 そうですね。もともと繰り返しになりますけれども、一連のことですね。川崎市で起きた事象というのが課題となって、ガイドラインをつくり、あるいは法が施行されとかということもそうですし、ガイドラインの裏づけとなるような条例というふうなのが必要ですよというふうなことの一連の流れでこの条例をつくってきたということでございます。

【記者】 いや、要するに法律が施行されてからも、そのヘイトスピーチが行われる蓋然性が高い状況が続いているというのは、裏返すと結局、法律が施行されても、行われる状況は、蓋然性が高い状況は防げてないということ。

【市長】 これも、これまで言っただけでしたが、ヘイトスピーチ解消法は、できたことというふうなものによって、私どものガイドラインがつけられたりというふうな、そういう意味では一定の成果はあったと思いますが、理念法でありますので、そこはやはりしっかりと地域の実情に応じた私どもの取組をしていかなければならないという課題というのはちょっと持っておりましたので、そういった一連の流れの中での条例の提案ということになります。

【記者】 その罰則というのは、やはり全市民だけじゃなくて、市内を訪れた市外の人も対象になることですので、その辺の必要性というのがどれだけ共有できているのかというところが、市民の間でどれだけ共有できているんだろうかというところがち

よっと疑問に思っているところで、なぜこの話に罰則が必要なのかというのをどうやって市民の方にわかってもらうような努力というのを、市はこれからどうしていこうと思っっていますか。

【市長】 例えば川崎の北部地域に住んでいる、よく言われているんですが、北部地域に住んでいると、川崎駅周辺で起こっている事態というのを見たりとか、聞いたりする機会というのが非常に少ない。だから、あまり自分ごととして考えられていないという話もいろいろなところから聞きます。

しかし、同じこの川崎市内でこういうことが、実際に人権を侵害するようなことというのが、可能性があることも含めて行われているということをやはり広く市民の皆さんに知っていただいて、これはヘイトスピーチだけではありませんけども、全ての人権というのがしっかりと尊重され、不当な差別を受けることがない社会をみんなで作っていくというのは、これは繰り返しになりますけども、ヘイトだけの話ではなく、全ての差別に対する、許さないんだということを市民の皆さんにしっかりと共有していく必要があるかなと思います。その努力は、この条例の制定の過程を通じてもそうですけれども、仮に制定された後においても、よりその取組というのを強めていかなければならないなと思っっています。

【記者】 わかりました。ありがとうございます。

【市長】 はい。

【記者】 すいません。それに関連してなんですけれども、相模原市の本村市長が川崎と同レベルの条例を制定していきたいということをおの間、会見で話されたそうですけど、他都市の話ですけれども、そういった動きが広まっていくことについて、市長はどのように受けとめていらっしゃるのでしょうか。

【市長】 そうですね。本村市長がそのように発言されたということは、私としても大変歓迎すべき話だと思っっています。実際に相模原でも同様のケースというふうなのは見られるというのは、私も聞いておりますので、その問題意識を共有していると思っっていますから、そういった意味で、連携していくということは大事なかなと思っっています。

【記者】 わかりました。

【記者】 すいません。条例の件で引き続き教えてください。

【市長】 はい。

【記者】 市長のお手元に届く反応や反響は、どのようなものが届いていたり、反響は大きいと認識していらっしゃるのでしょうか。報道された後の話なんですけど。

【市長】 そうですね。大変反響が大きいと思っっています。パブリックコメント前に

おいても、いろんな形で、市長への手紙も1つですけども、声は届いていますので、川崎市内というか、むしろ市外のほうが多いかもしれませんが、さまざまな意見が届いているというのはありますね。

【記者】 激励や批判、それぞれ。

【市長】 はい。

【記者】 漠たる言い方で恐縮です。条例の出来ばえはいかがでしょうか。

【市長】 自信を持って作業に当たってきて、それを提出しているものですから、出来ばえって、自分たちで評価することはおかしいと思いますが、しかし、議会に対して自信を持ってお示しさせていただいています。

【記者】 罰金刑と表現しちゃいますけど、要は前科者になるわけですから、最高裁まで行っても十分闘えるものになっているというふうな捉え方をしているのでしょうか。

【市長】 私どもとしては、表現の自由にも十分に配慮して、そして、私たちの判断というよりも、司法の判断をしっかりと仰いでいくというプロセスも含めておりますので、よほどというか、確信犯的に繰り返し行っていくというものが対象となるということでもありますので、本当に慎重に慎重を期してつくり上げてきたものでありますので。

【記者】 わかりました。ありがとうございます。

【記者】 すいません。条例について、ちょっと気が早いことかもしれないんですけども、市長は、議場でのご答弁で、市民の総意でつくり上げたいとおっしゃっておられました。

【市長】 はい。

【記者】 その市民の代表である市議会のほうでは、議長が全会一致での成立が望ましいという姿勢を崩してはいらっしゃいませんでした。市長、もちろんこれは議会での話になりますけれども、市長はどのような、やっぱり議長と同じようなお考えでしょうか。どのようにお考えでしょうか。

【市長】 私も繰り返しこの場でも申し上げてきたと思いますが、市民の総意というのは、市議会での全会一致でありますので、そういう意味では、私も全会一致で議決いただけるような努力、説明というものをしっかりとやってまいりたいと思います。

【記者】 仮にですけれども、仮の話で恐縮なんですけど、仮に全会一致にならなかった場合というのは、今後、何かご対応というのはどのようにお考えでしょう。

【市長】 現時点では全くそういうことを考えておらず、全会一致をしっかりと目指

していくということです。

【司会】 ありがとうございます。

【司会】 ほかはいかがでございますか。特にないようでございますので、本日の市長記者会見はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

(以上)

・この記録は、重複した言葉づかい、明らかな言い直しや質問項目などを整理したうえで掲載しています。

(お問い合わせ) 川崎市役所総務企画局シティプロモーション推進室報道担当

電話番号：044(200)2355

— 了 —